Japanese Psychological Review
2022, Vol. 65, No. 4, 431–442

自己の客観性を過信する傾向についての一考察[1)]

―研究の系譜とその適応的意義の検討―

神　原　　歩
京都先端科学大学

Overconfidence about one's own objectivity: A historical review and consideration of adaptive significance

Ayumi KAMBARA
Kyoto University of Advanced Science

Extant research has robustly demonstrated over time that social judgment is frequently influenced by motivational and cognitive biases that compromise objectivity in social perceptions. Individuals typically fail to recognize biases in their social judgment, despite substantial evidence. Scholars indicate that this tendency due to naïve realism: people tend to be overconfident about their objectivity and believe that they see the world as it is (Ross & Ward, 1996). As observed, human perception and judgment are frequently biased. The lack of awareness of one's bias can itself be dubbed "biased perception." An emerging point of view is that many cognitive errors can support personal, societal, or evolutionary advantages (Haselton & Buss, 2000) and that blindness to one's bias may be a product or by-product of adaptation. This article summarizes previous empirical and theoretical research findings that provide preliminary support for overconfidence in one's objectivity and discusses this tendency from social and ecological validity perspectives.

Key words: naïve realism, bias, overconfidence of one's own objectivity, adaptive significance
キーワード：ナイーブリアリズム，バイアス，自己の客観性の過信，適応的意義

「（精神療養施設での発言）何故なら私たちはみんな自分たちが『歪んでいる』ことを知っているからです。そこが外部世界とはまったく違っているところです。外の世界では多くの人は自分の歪みを意識せずに暮らしています。」

村上春樹「ノルウェイの森　上」p. 164

私たちは，自分を取り囲む環境の中で，例えば目の前にあるコップひとつから人生に起こる大きな出来事まで，対象を「……は，……である」というように理解する。このように，何かを知ること，わかることに関係する精神的活動は「認知」と呼ばれている。この認知は，知覚や記憶，思考を含む，何かを知る活動を指す（今井，1999）。この認知過程において，私たちは対象をあるがまま受動的に認識しているわけではない。取り入れた情報を内的処理過程において主体的に分析し，再構築することによって，その1つの解釈を作り上げているに過ぎない。

しかし近年の研究は，人が一般的に，自分はありのままに世の中を見ていると信じている様子を報告している（Armor, 1998；Pronin, Lin, & Ross, 2002）。前述の通り，人の認知は，その人の立場，状況や願望等，認識主体側の要因の影響を多分に受けているのだから（例えば，Gilovich, 1991），この「ありのままに世の中を見ている」という認知自体が，ありのままではない，歪んだ認知であるといえる。

人が頑健に示す認知の歪みを社会的・生態学的妥当性から捉える視座が，近年の認知研究で注目を集めている（Haselton & Buss, 2000）。私たちがスムーズな社会生活を営むためには周囲の環境への適応，すなわち環境に合うように自らを変容することやその状態を維持すること（根ヶ山，1999）が必要であり，その自らの変容や状態維持の一環

1)　本稿は，筆者が2013年度に関西大学大学院心理学研究科に提出した博士論文の一部を加筆・修正したものを含む。本研究は科学研究費「21K02989」の助成を受けて行われた。

として，認知の歪みが生じているという視座である。そこで本稿では，人がありのままに世の中を捉えていると信じている傾向を，自己の客観性の過信と呼び，客観性を過信する傾向についての研究の系譜を述べ，その適応的意義について考察する。

1. 客観性を過信する傾向についての研究の系譜

ここではまず，人の認知が，認識主体側の要因の影響を多分に受けて歪むことに注目が集まり，その後，それらの歪みに人が無自覚であることが大々的に取り上げられるようになるまでの研究の経緯を概観する。

1.1　人の認知の歪みに注目が集まった

古くから，主に知覚心理学の分野において，刺激の物理的特性とその見え方に違いがあることは錯覚として研究がなされ，記憶のレベルにおいても，実際に経験した出来事と想起内容が異なることについて研究がなされてきた。また，1930年代以降発展したゲシュタルト心理学，またそれに続くニュールック心理学の出現により，人の知覚が対象を忠実に反映していないことは「見方によって見えるものは異なる」(Lewin, 1935)，人の経験はその人の知識や期待によって「所与の情報を超える」(Bruner, 1957) など，さまざまな形で指摘されてきた。これらは，人の認知の非合理性を示すというより，1950年代までに主流をなした行動主義的な考え方に対し，環境からの情報を組織化し構造化する役割を心が担っているという点を主張するものであったように見受けられる。

日常生活における社会的事象の認知の非合理性について大々的に取り上げられるようになったのは1970年代頃からである。この頃から認知心理学では人間を情報処理機構とみなし，情報を認識主体がどのように処理するかに注目した。そして，自己や他者，および周囲の環境など社会的事象の認知（social perception）や，それに基づく社会的判断[2)]（inferences and judgment）が，認識主体の置かれた状況や期待，立場，願望，既存の知識など，その認識対象とは直接関係がない様々な認識主体側の要因によって容易に歪むことが示された（for a review see, Gilovich, 1991；Kahneman, Slovic, & Tversky, 1982；Nisbett & Ross, 1980；Taylor & Brown, 1988；Wilson & Brekke, 1994）。例えば，人の推測は直前に呈示された全く関連がない情報の影響を受け（Tversky & Kahneman, 1974），自分とは全く関連がない他者の思考や行動を自己と関連づけて解釈する傾向などが報告された（Zuckerman et al., 1983）。このように，1970年から約40年の間，人の認知や社会的判断が認識対象とは直接関係がない要因の影響を受けたものであることを示す膨大な研究結果が示された。そして系統的にみられる歪みが認知・動機バイアス（以下，バイアスとする）として指摘されるようになった（for a review see Nisbett & Ross, 1980）。

1.2　人は自分の認知の歪みを自覚しているのだろうか

前項で取り上げた1970年代以降のバイアスについての研究は，人の認知や社会的判断が認識対象とは直接関係がない様々な認識主体側の要因によって「どのように歪曲するのか」という，歪みそのものに焦点をあてており，その歪みに対する認識，すなわち認識主体がその歪みを自覚しているかについては注目していなかった。人は自分が対象をありのままに捉えていると信じているのだろうか，それとも自分の状況や期待，立場，願望，既存の知識など，認識対象とは直接関係がない要因の影響を受けて，歪めて捉えている可能性に気付いているのだろうか。

個々のバイアスについての研究における実験参加者の事後報告を参照すると，人は自分が対象をありのままに捉えていると信じている様子がうかがえる。たとえば，バイアスの1つであるハロー効果についての実験（Nisbett & Wilson, 1977）では，実験者の予測通り，実験参加者が行った印象評価は，1つの特性情報（温かい or 冷たい）の影響を過度に受けていた。しかし，実験後のインタビューで，1つの特性情報の影響を受けて印象評

2) 「社会的認知」という言葉は意思決定や推論も含む意味で用いられることもある。ただし，本稿における「認知」は，前述のとおり，何かを捉えたり，理解したりする活動とその結果としての表象（態度やイメージ）を指すため，社会的認知は，社会的事象に対する理解を意味する言葉として扱う。そして，その理解に基づく意思決定や行動を，社会的判断と記す。

価をしたという，その過程を実験参加者は否定したとの報告がなされている。また類似した例として，認知情報処理の実験と称して参加者にいくつかの性格特性語を呈示（事前呈示）すると，その後の印象評価において，事前呈示された性格特性語と一致した印象評価をする傾向がみとめられること，そして実験参加者はその事前に行った認知情報処理実験が，その後の印象評価に影響を及ぼしたことに無自覚であることが示唆されている（Higgins, Rholes, & Jones, 1977）。これらの報告から，人が自分の認知や判断が認識対象とは直接関係がない要因の影響を受けて歪んでいる可能性に如何に無自覚であるかが伺える。このように人が自分の認知に及ぼす様々な要因の影響に無自覚な様子は，他の研究の実験後インタビュー結果からも示唆されている（例えば，Vorauer & Miller, 1997）。

1.3　認知の歪みに人が無自覚であることについての包括的理論が登場した

前項で取り上げた研究は，個々のバイアス生起を確認することを主目的とし，実験参加者がそれらのバイアスの影響に無自覚であったことを偶然の発見として報告している。すなわち，これらの研究は特定の状況において人がバイアスに気づかなかったことについての事例的報告であるといえる。それに対し，人が自分の認知や判断が認識対象とは直接関係がない様々な要因の影響を受けていることに無自覚な様子を，人間の一般的な傾向として包括的に論じたのはRoss and Ward（1996）である。Ross and Ward（1996）は，自分の心の中での現象（思考や願望など）と外界で生じている現象（事実）を区別し難いという，年少の子供の思考に見られる特徴が大人になっても完全に消えることはなく，自分の主観的経験は対象をありのままに捉えた結果であると考える傾向が大人にも見られると指摘した。そして，主観的経験を生起させた現象の特性と主観的経験との関係を人がどのように理解しているかについて，ナイーブリアリズム理論（Tenets of Naïve realism）として次のように述べた（以下，Ross and Ward（1996），pp. 110–111，筆者訳）。

1. 私は，実在するもの，または出来事などを，客観的事実に基づいてありのまま受けとめている。そして，私の態度，信念，好み，優先順位などは，比較的，私の個人的感情や偏見に基づくものではなく，原則として「何の影響も受けずに」情報や証拠をありのままに捉えた結果として生じたものである（第1の信念）。
2. 理性的に社会的現象を捉えている人は，概して私と同じ反応や行動をとり，同じ見解をもつ。私の見解を生み出したものと同じ情報に触れ，思慮深く，公正な心で考えた結果である（第2の信念）。
3. もし，他者もしくは他集団が私と同じ見解を抱かない場合は，以下の3つの可能性が考えられる。(a) その他者もしくは他集団は，私たちと同様の情報を得ていないのかもしれない（そうすると，彼らに私たちと同じ情報を与えれば，きっと同じ見解に至るだろう）。(b) その他者もしくは他集団は怠惰なのか，理性的でないのか，もしくはその事実の解釈を規範的な方法で行っていないのか，できないのか，もしくは，したくないのだろう。(c) その他者もしくは他集団は，政治・社会的思想や，個人的興味，もしくはその他の個人的な理由の影響によって（その事実を解釈する過程においてか，もしくは結論への導き方のどちらかにおいて）偏った捉え方をしているのだろう（第3の信念）。

このようにRoss and Ward（1996）はナイーブリアリズム理論を提唱したが，その核となる「私はありのままに世の中を捉えている（第1の信念）」ということを直接的に示す実証的研究結果を示したわけではない。彼らは，人が自分の主観的経験を他者も共有していると捉える傾向を示すこと（Newton, 1990；Ross, Greene, & House, 1977），またその傾向が人による物事の捉え方の多様性を考慮しないことによって生じていること（例えば，Gilovich, 1990）などから，人が「私はありのままに世の中を捉えている」と信じているであろうことを主張したといえる。

1.4　認知の歪みへの無自覚さについての実証研究が行われるようになった

Ross and Ward（1996）以降，認識対象とは直接関係がない様々な認識主体側の要因が自分の認知

や判断に及ぼす影響を人がどのように認識しているのかに焦点をあてた研究が行われるようになった。初めは，特定のバイアス（たとえば，基本的帰属のエラーや，自己高揚的な責任帰属）を取り挙げ，人が自分は他者より，その特定のバイアスの影響を受けていないと捉えている傾向が報告された（Kruger & Gilovich, 1999；Van Boven, Kamada, & Gilovich, 1999）。

続いて，特定のバイアスについてだけではなく，バイアス全般において，人はおしなべて自分が他者よりそれらのバイアスの影響を受けていないと捉える傾向が示されるようになった（Pronin et al., 2002）。具体的には，これまでの心理学研究で頑健にその傾向が認められている7つのバイアス（例えば，利己的帰属：自分の失敗の原因は運や条件の悪さにあると考え，自分の成功は自分の能力や努力によるものだと考えるバイアスなど）についての説明文を呈示し，自分自身および一般的な他者の認知や判断がそれらのバイアスの影響を受けている程度を推測するよう求めた。その結果，測定したいずれのバイアスにおいても，人は自己の認知や判断が受けているバイアスの影響の程度より，一般的な他者が受けているバイアスの影響の程度を高く認知していることが示された。

また，人が自分は他者よりも客観的であると信じていることをより直接的に示した研究もある。Armor（1998, study1）は，「自分のスキルや能力について，客観的に判断している」「他者の個人的資質を公平に判断している」など，その人物が客観的であることを示す12の項目について，自分および同じ大学に通う一般的な学生がどの程度当てはまると思うかを実験参加者に尋ねた。その結果，参加者の約90パーセントが，自分は一般的な学生より客観的であると回答したことが報告されている。90パーセントの学生がその他の学生より客観的であることは論理的に生じ得ないことから，この現象は客観性幻想（illusion in objectivity: Armor, 1998）と呼ばれている。Pronin et al.（2002）やArmor（1998）の結果から，人は自分が他者よりもありのままに自己や他者，社会的事象を捉えていると信じていることが示されたと言える。これらの結果によって示されたのは，人は「他者と比較して」自分の客観性を信じているということである。したがって，ナイーブリアリズムの第1の信念そのものを支持する結果とは言えないが，「（他者よりも）私はありのままに世の中を捉えている」と人が信じている様子が示されたと言える。

その後，ナイーブリアリズムの第3の信念を支持する，人が自分と異なる意見をもつ他者のバイアスを高く認知する傾向についても知見が積まれた。人は，他者が自分とは相反するものの見方をしていることを知ると，その見方は，政治的立場（Cohen, 2003）や私的感情（Frantz, 2006），自己利益（Reeder et al., 2005, study 1, 2）の影響を受けて導かれたものであると捉える。そして，その見方を，上記の政治的立場など個々の要因の影響を受けていると捉えるに留まらず，それらの影響をおしなべて受けた，すなわち全般的にバイアスがかかった見方であると捉えることが示された（例えば，Kennedy & Pronin, 2008, study1；Robinson et al., 1995）。更には，相反する見方それ自体をバイアスがかかっていると捉えるだけでなく，相反する見方をするその人に対してバイアスがかかった見方をする人だ（例えば，自己利益を重んじ，利他精神に欠け，知識が浅く，不合理な判断をする）という印象を抱くこと（Reeder, et al., 2005, study 4），そしてその傾向はその人の見方が自分の見方と相反する程度が大きいほど強くなることが示されている（Pronin, Gilovich, & Ross, 2004）。

さらに近年の研究は，自分の客観性を過信している，つまり自分の認知・判断に含まれるバイアスに無自覚な人ほど，社会問題についての自分の態度の合意性を高く推測し，また自分とは相反する態度を受け入れない，というナイーブリアリズムの3つの信念を直接支持する研究結果を報告している（Liberman et al., 2012）。

このように，ナイーブリアリズム理論が提唱されてから十数年の間に，人が自分や他者の認知・判断をどのように捉えているかについて様々な検討がなされた。それらの研究結果を概観したところ，ナイーブリアリズム理論は概して支持されてきたように見受けられる。

ナイーブリアリズム理論を支持する代表的研究結果である，Armor（1998）およびPronin et al.（2002）が検討した項目は，自己認知，他者認知，社会的事象に対する認知や判断と多岐にわたる。そこで，本稿における客観性の過信とは，Ross

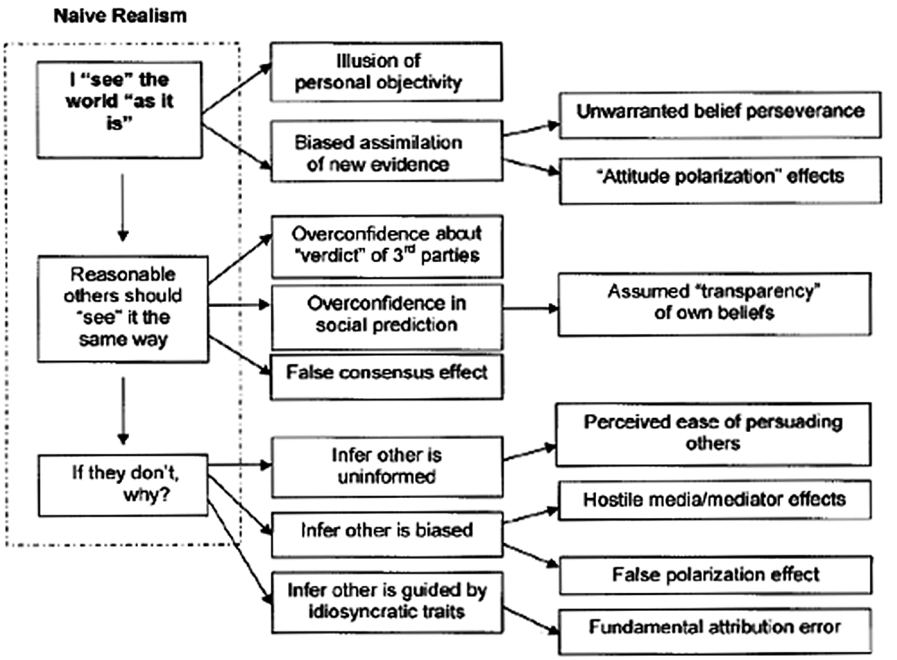

図1　Convictions of naïve realism and resulting consequences and phenomena relevant to conflict and misunderstanding (Pronin, Lin, & Ross, 2004)

and Ward（1996）で記されているように，自己認知，他者認知，社会的事象など，全てに対する認知について「私はありのままに世の中を見ている」と信じている傾向のことを指す。Pronin et al.（2004）は，これまでに発表されたいくつかの認知の歪みと，ナイーブリアリズムの3つの信念の関係について整理している（図1）。自分がありのままに世の中を捉えていると思うことによって，皮肉にも自己や他者，それを取り巻く社会について，ありのままではない認知が生じていることが示されたといえる。

2. 自己の客観性を過信することについて適応的観点からの検討

情報処理過程に混入する認識主体側の要因やそれに基づく認知の歪みについて人は自覚し難く，自分はありのままに世の中を捉えていると信じている様子について前項では述べた。すなわち，自己の客観性を過信すること自体が，ありのままでない認知，すなわち認知の歪みであると言える。

自己の客観性の過信は，私たちにどのような影響をもたらしているのだろうか。近年，系統的な認知の歪みを，単なる情報処理の誤りとしてではなく，社会的・生態学的妥当性から捉える視座がある（Haselton & Buss, 2000；Kenrick & Simpson, 1997）。前述のとおり，認知とは，入力情報からその解釈を生み出す情報処理プロセスである。また，人は1人で生きているわけではなく，周りの環境を理解しそれに適応する必要がある。そのため，認知の歪みが単なる情報処理の誤りであるなら，このような認知様式が長年淘汰されずに維持されてきたとは考え難い。したがって，認知の歪みは何らかの形で適応を促し，個体の生存に有利に働くようにできているはずであるという見方である。

そこでここからは，客観性を過信することが，その個人にとってどのような適応的意義があるのかについて検討する。まずは，客観性を過信することが，自己の他の一側面についての肯定的認知と同じ働きで適応に寄与している可能性について考察する。肯定的に偏った自己認知が精神的健康を支えている可能性は既に数多く報告されており（遠藤，1995；Taylor & Brown, 1988），客観性の過信も，「客観性」という自己の一側面についての肯定的な認知として精神的健康を支えている可能

性が考えられるからである。

続いて，人が客観性を過信する1つの原因であると考えられている，認知が構成されるプロセスに焦点を当てる。そして，そのプロセスが認識主体の外的適応という点においてどのような意味を持つのかについて考察する。これらの2点を踏まえて，客観性を過信することの適応的意義について総合的に考察を行う。

2.1　客観性の過信は自己の一側面の肯定的な認知として適応に寄与しているのか

1980年代から，人が自分自身を実際以上に肯定的に捉えていることに注目が集まった。例えば，本邦でも「やさしさ」「まじめさ」などについて，多数の人が（統計上有意に），自分は平均以上だと捉えていることが報告された（外山・櫻井，2001）。客観性の過信もこれらと同じように，「客観的である」という自己の一側面についての肯定的な認知として捉えることができるが，これらの研究では，自己の一側面として「客観性」が取り上げられることはなかった。さらに1990年代以降，肯定的に偏った自己認知が精神的健康と関係することが盛んに示されるようになった（例えば，遠藤，1995；Taylor & Brown, 1988）が，それらの研究においても，自己概念の一側面として客観性が取り上げられることはなかった。したがって，客観性の過信と精神的適応との関連についてはこれまで検討がなされていないように見受けられる。

客観性の過信は，自己の他の一側面の肯定的な認知と同じ働きで適応を促しているのだろうか。客観性を，「やさしさ」「まじめさ」などのように数ある自己概念の1つとして捉え，客観性の過信を自己の一側面についての肯定的な認知として精神的適応に役立っていると捉えるなら，ここで改めて客観性の過信の適応的意義について取り挙げる必要はない。しかし，客観性について取り扱った数少ない研究は，客観性の過信が自己の他の一側面についての肯定的な認知とは異なる性質をもつことを示している。

Steele（1988）の後に続く自己肯定化（self-affirmation）の一連の研究によると，自己の重要な一側面の肯定性を再認識（affirmation）すると，全体としての自己肯定感が保たれやすくなるため，脅威となる情報を受け入れる，意見が異なる他者に対しても公平な判断をくだす（例えば，Cohen & Garcia, 2005；Steele & Liu, 1983）など，自己脅威への防衛反応が減少することが示されている[3)]。その一方で，自己の客観性の肯定性を再認識すると，人はそれまで保持していた偏見的な認知をより強めることが示されている（Banks et al., 1977；Uhlmann & Cohen, 2007）。自己の他の側面を肯定すると自己脅威となり得る新たな情報を受け入れやすくなるのに対し，客観性を肯定すると元々ある信念を強めるという点で，客観性と自己の他の一側面とでは，その肯定的な認知が自己にもたらす影響が異なるように見受けられる。

2.2　客観性の過信は物理的知覚の適応機能の派生なのか

ここまで，自己の客観性を過信することは，自己の他の一側面の肯定的認知とはその性質が異なる可能性について指摘した。自己の一側面の肯定的な認知として自己を守っているわけではないなら，客観性を過信することには，どのような適応的意義があるのだろうか。

いくつかの研究を概観すると，人が客観性を過信する原因となるプロセスは，次のように考察されている。私たちは自分の判断にバイアスがかかっていないかを考える時，自分の「思考」の中にそのような傾向がないかを調べるが，認知・判断を構成するプロセスが自動的・無意識的であるため，自分のバイアスに気づかないという（Pronin & Kugler, 2007）。この考察が正しいとするなら，人が自己の客観性を過信するのは，認知・判断を構成するプロセスが自動的・無意識的であることに起因しているようである。

自己の認知・判断を構成するプロセスが自動的・無意識的であることは，外的環境への適応にどのように役立っているのだろうか。人の認知には，単純な物理的知覚から複雑な社会的判断まで様々なレベルがある。物理的知覚においても，末梢感覚受容器で得られた情報は，中枢で環境，経験，学習を加味して再構成されており（古賀，2011），視覚経験が対象の物理的特性のありのま

3)　ただし，その脅威と関連する自己の一側面を肯定した場合は，例外として防衛反応は増幅する（Blanton et al., 1997）。

まの反映でないことは周知の事実である（Bugelski & Alampay, 1961；Leeper, 1935）。しかし，人は物理的事物を対象とした知覚においては特に，自分が対象をありのままに捉えていると信じて生きており，また自分が「ありのままに」外界を捉えていると信じて支障をきたすことが殆どない（Pronin et al., 2004）。例えば，目の前にボールが飛んできているように思ったが，本当はボールが存在しなかったというようなことは生じない。それだけでなく，私たちは，自分にとってボールが見えたら他者も同じようにボールが見えると信じており，それがボールには見えないという人がいたら，その人は違う所を見ているのかそれとも目が悪いのかと考えるだろう。物理的知覚に限ると，ナイーブリアリズムの第1の信念「自分はありのままに見ている」だけでなく，第2「他者も同じように見る」，第3「同じように見えない人は変である」の信念も，当てはまりが強くなる。

さらに，自分の物理的知覚を信じて生きることは，不都合がないだけでなく，それを失うことによって生存の危機に直面することは容易に想像がつく。例えば，ボールが飛んできたら，本当にボールは飛んできているのだろうかと考えるより，まず先に避けようと身体が反応することは，人が身を守る上で必要な機能である。したがって，物理的知覚においては，知覚を構成するプロセスが自動的であることや，自分の知覚経験が外界のそのまま反映であると信じるナイーブリアリズムの第1の信念は，人の生存にとって重要な適応機能である。

この低次の情報処理過程であると捉えられている物理的知覚と，高次の情報処理過程であると捉えられている社会的事象の認知は独立したものではなく，物理的知覚経験が高次な認知機能に影響を与えていることに注目が集まっている（for a review, see Meier et al., 2012；Niedenthal et al., 2005）。具体的には，物理的な温度の知覚が，対人印象形成に影響を与える（Williams & Bargh, 2008a），物理的な距離の知覚が，他者との心理的距離に影響を与える（Williams & Bargh, 2008b）などが報告されている。このように，物理的知覚が社会的判断に影響を与えるなら，物理的知覚をそのまま受け止めるという適応機能が基となり，社会的判断の客観性を過信する傾向が生じている可能性が考えられる。

近年，物理的知覚の派生として自己の社会的判断を過信する傾向が生じている可能性について検討した研究が散見される。Kambara（2017）は，物理的知覚を信じることと，社会的判断の客観性を信じることの関連に着目した。そして，錯視は物理的な刺激と知覚とのずれを明示する刺激（Banaji & Greenwald, 2013）であることから，錯視経験によって自分の社会的判断に含まれるバイアスに自覚が高まるかを検討した。具体的な刺激として，錯視条件では静止画が色の対比効果や形によって，あたかも動いているように見える動く錯視が用いられている（Goldstein & Brockmole, 2016）。動く錯視を紙に印刷して呈示すると，「静止している」という紙の特性と，「動いている」という見え方に差異を覚え，自らの知覚が必ずしも物理的特性とは一致しないことを目の当たりにする。結果として，錯視を呈示しない統制条件より錯視経験条件では，自分の社会的判断に含まれるバイアスに自覚が高まることが示された。これらの研究は，自らの物理的知覚が必ずしも物理的特性とは一致しないことを目の当たりにすることによって，自己の認知や判断における客観性の過信，すなわちナイーブリアリズムの第1の信念が揺らぐことを示唆している。また，神原（2021）は，同様の手続きを用いて，錯視経験が，相反する意見を持つ他者へのバイアス認知に与える影響を検討した。その結果，錯視経験によって相反する意見を持つ他者への過度なバイアス認知が緩和することが示された。すなわち，自らの物理的知覚が必ずしも物理的特性とは一致しないことを目の当たりにすることによって，ナイーブリアリズムの第3の信念が揺らぐ可能性も示唆したといえる。以上から，人が客観性を過信する傾向は，自分の見たものを実在する対象のありのままの反映として受け止めるという物理的知覚の適応的習慣と関連している可能性が示唆されたといえる。

2.3　客観性を過信することの適応的意義は何か

ここまで，自己の客観性を過信することは，自己の他の一側面の肯定的認知とその性質が異なる可能性，及び外界をありのまま捉えていると信じて疑わない物理的知覚の適応機能と関連がある可能性について述べた。これらの考察から，自己の

客観性を信じることは，どのように適応に結びつくと捉えられるだろうか。

前述の通り，適応とは，周囲を理解しそれに合わせて自らを変容させたり，その状態を維持することである。わたしたちを取り巻く環境を理解する際のひとつの問題点は，現実だと思える目の前の知覚された世界も，より複雑な社会環境や出来事の理解も，共通するのは全て意識の中に現われた世界としか言えず，「そのように感じた」という以上のことを確認できないことにある。浦・北村（2010）は，人が世界を理解する際のこのような不確かさについて「根本的に人は世界についての『真実』を直接認識できるものではなく，ある観点から切り取った説得性や信憑性の高い現象を解釈し，信じるだけである（p. iv）」と述べている。このように，物理的事象においても，社会的事象においても，感じられたものとそれに対応する事実があるか否かを確かめようがない環境の中で，限られた時間とエネルギーを用いて生きていくには，確かめようがない認知やそれに基づく判断を，一旦確かなものとして信じることが必要となるのではないだろうか。

Uhlmann and Cohen（2007）は，人が客観性を過信するメカニズムの1つの可能性として，まず人が何かを信じるという自動的段階が第一段階としてあり，第二段階として，それが正しいものであるかを検討・修正する意識的段階があること（Gilbert, Krull, & Malone, 1990）に触れている。人が何かを捉えて信じる段階が自動的であるから，それを疑い調整する段階に意図的に認知的労力を払わない限り，自分の捉え方を正しいものとして受け止めるということである。

何かを信じる段階が自動的であり，検討と修正をする段階が意識的であるという論理を直接支持する研究は認められないが，自己の客観性の過信による認知の歪みのいくつかは利用可能な認知容量が限られているときに増幅することが示されている（例えば，Epley & Gilovich, 2006；Gilbert, Pelham, & Krull, 1988；Stanovich & West, 2008）。この結果は，第二段階に認知容量を要するという見解と一致していると言えるだろう。

Uhlmann and Cohen（2007）の論理を正しいとするなら，客観性についての信念が揺らぐと，第二段階の認知や判断の再検討が頻繁に行われ，より多くの認知的労力を要することになる。日常生活において，人は限られた認知容量で多くの判断を下さないといけないから，1つの判断への認知的労力が増すことは，他の活動に利用できる認知容量を制限すること繋がり，適応上の大きなデメリットとなり得るだろう。したがって，客観性を過信すると，第二段階の認知的活動が不要となり認知的労力の節約につながるという点で，適応に寄与している可能性が考えられる。

さらに，自己の客観性を信じることが適応に寄与している可能性は，自己認知の確信度と精神的健康の関連からも示唆されている。例えば，自己概念の内容について明瞭に確信を持っている程度やその安定性（Campbell et al., 1996）が，抑うつ，特性不安，神経症傾向などと負の相関を示す，すなわち精神的健康の高さと関連することが示されている（e,g., Smith, Wethington, & Zhan, 1996）。Smith et al.（1996）の研究結果を自己認知以外の認知についても一般化できるかは不明であるが，認知や判断を一旦確かなものとして信じている状態が適応と関連する可能性を示していると言えるだろう。

以上から，客観性の過信によって，あらゆる自分の認知・判断を一旦信じることが可能となり，個々の活動に時間や認知容量を過分に投資することを防ぎ，精神的健康を保ち，スムーズな社会生活が実現している可能性が考えられる。そうであるなら，自己の客観性についての認知は，その他の数ある認知と横並び，すなわちそれらの中のひとつというより，全ての認知の根底にあり，それらの確信を助ける「自分の認知についての信念」であると位置づけられる。

客観性についての信念が，他のすべての認知の根底にあるという考察は，客観性についての肯定的な認知が自己の他の一側面の肯定的な認知とその性質が異なることとも矛盾しない。肯定的に偏った自己認知の適応的意義については数多く知見が積まれてきたが，客観性の過信についての適応的意義は，それらとは独立して注目されるべきであろう。

2.4　客観性を過信することには適応的側面しかないのか

これまで，自己の客観性を信じることの適応的

側面に焦点をあてた。しかし，客観性の信念は，ポジティブな側面だけを有するわけではない。ここでは，客観性の過信が人に及ぼすと考えられるネガティブな側面について述べる。

まず1つめは，自己の認知や判断を省みる機会が減少することである。自分の認知や判断はバイアスの影響を受けていないと信じることによって，人は自分のバイアスを正そうとする努力をしなくなるだろう（Wilson & Brekke, 1994）。また，一時的には脅威もしくは不愉快であるが，長期的には学習の機会となるような外界からの情報を受け入れず，再考するチャンスを逃す可能性もある（Banks et al., 1977；Crocker & Major, 1989）。

2つめは，対人関係に悪影響を及ぼすことである。例えば，客観性を過信すると他集団に対するステレオタイプ的な見方が強まることが示されている（Uhlmann & Cohen, 2007）。また，他者と自分との間に意見の不一致が生じた場合に，話し合いなど和解に向けた活動をするより攻撃行動を選択する確率が高まることが示されている（Pronin, Kennedy, & Butsch, 2006；Reeder et al., 2005）。

このように，客観性を過信することは外的世界と内的世界とを照らし合わせて再考する機会を奪い，また自己や社会に対する既存の認知と相容れないものに対して拒否的反応を起こすなど，柔軟で多角的な思考を阻む原因でもある。客観性を過信することの適応的意義について論じるとき，これらの対人関係におけるネガティブな側面を同時に考慮することを忘れてはならない。

3. 今後の課題・展望

本稿では，客観性を過信することの適応的意義について理論的考察を行った。ただし，客観性を過信することの適応機能について実証的に明らかにするためにはまだ多くの課題がある。

まず1つめは，客観性についての信念と認知容量との関係についてである。前述の通り，利用可能な認知容量が限られているときに客観性の過信による認知の歪みが増幅することは既に指摘されている（Epley & Gilovich, 2006；Gilbert et al., 1988；Stanovich & West, 2008）。その一方で自己の客観性を過信することが，認知容量の節約につながるという因果関係について直接的な検討はなされていない。自己の認知をそのまま受け入れるという自動的な第一段階の次に，その客観性を疑い・修正する意識的な段階があるなら，自己の客観性を疑い・修正しようとすると認知容量を消耗する，また反応時間が遅くなるはずである。自己の客観性の過信の適応機能について，今後は認知容量や反応時間との関連も含めた検討が必要であろう。

2つめは，物理的知覚を信じることと，社会的判断の客観性を過信することの関係である。Kambara（2017）では，物理的知覚を疑う経験によって，自分の社会的判断のバイアスへの自覚が高まることを示している。この結果は物理的知覚を疑うことにより，自分の社会的判断の客観性についての信念が揺らぐ可能性を示唆しているが，物理的知覚の過信が基となって社会的判断の客観性の過信が生じていると断定できる結果ではない。今後，物理的知覚と社会的判断の客観性の過信との関連についてより多角的な検討が望まれる。例えば，Kambara（2017）と逆の影響過程，すなわち自己の社会的判断の誤りに直面した場合に，自分の物理的知覚を疑うような傾向が生じるかを確認することによって，物理的知覚と社会的判断の客観性を過信する傾向との主従関係の一端を明らかにできるだろう。

最後に，客観性を過信することの適応的意義についてよりマクロなレベルで捉えることを残された課題として挙げる。本稿では客観性の過信とその認識主体の適応機能との結びつきについて，個人内過程に焦点をあてて検討を行った。しかし，客観性の過信が個人の心理的適応を支え，その影響が個人内で完結するということは考え難い。人は，相互作用する他者の理解度や確信度に，大いに影響を受けることが示唆されている（Echterhoff, Kopietz, & Higgins, 2017）。

具体的に，ある人が自己の認知・判断に確信を持っている程度が，他者がその情報を受け入れる程度に影響を与えることを示唆するものとして，目撃証言の研究が挙げられる。目撃証言の研究では，その証言の正確さと証言者の自信には非常に弱い正の相関しか見られないにも関わらず，証言者の確信度が，その証言が人に信じられる程度に強い正の影響を与えることを報告している（Bothwell, Deffenbacher, & Brigham, 1987）。その情報の正確さに関わらず，「私は確かに見た」と

いう，その人が自分の認知・判断を信じる程度が，その情報が他者にとって信用される程度に影響を与えることを示しているといえる。

これらの研究結果から，自己の客観性を信じる程度は，その個人内だけでなく他者の認知・判断に影響を及ぼすと考えられる。しかしこれまで，客観性の過信と，他者，他集団ひいては社会環境との相互作用に与える影響については十分な検討がなされていない。客観性についての信念がその個人に与える影響だけでなく，社会環境との相互作用に与える影響についても今後検討が求められる。

4. 結　　語

本稿では，客観性の過信についての心理学的研究の動向を紹介した。そして，客観性の過信にどのような適応的意義があるかについて論じると共に，今後の課題・展望を述べた。前述したように，自己の客観性を信じることが，全ての認知や信念の確信を助ける「自己の認知についての信念」であるなら，客観性を信じるか否かが人の精神的健康に与えるインパクトは大きいであろうことが予想される。しかしながら，客観性については，概念の抽象度の高さ故か，その重要性の割に十分な注目を集めてきたようには見受けられない。今後，自己の客観性を信じる傾向が人間の態度や行動，精神的健康，ひいては対人相互作用にどのような影響を及ぼしているのかについて，より多くの知見が積まれることを望んでいる。

利益相反について

なお，本稿に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

文　　献

Armor, D. A. (1998). The illusion of objectivity: A bias in the perception of freedom from bias. (Unpublished doctoral dissertation). University of California, Los Angeles, CA.

Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2013). *Blindspot: Hidden biases of good people*. New York, NY: Delacorte Press.

Banks, W. C., Stitt, K. R., Curtis, H. A., & Mc Quater, G. V. (1977). Perceived objectivity and the effects of evaluative reinforcement upon compliance and self-evaluation in Blacks. *Journal of Experimental Social Psychology*, *13*, 452–463.

Blanton, H., Cooper, J., Skurnik, I., & Aronson, J. (1997). When bad things happen to good feedback: Exacerbating the need for self-justification with self-affirmations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *23*, 684–692.

Bothwell, R. K., Deffenbacher, K. A., & Brigham, J. C. (1987). Correlation of eyewitness accuracy and confidence: Optimality hypothesis revisited. *Journal of Applied Psychology*, *72*, 691–695.

Bruner, J. S. (1957). *Contemporary Approaches to Cognition*. Cambridge. MA: Harvard University Press.

Bugelski, B. R., & Alampay, D. A. (1961). The role of frequency in developing perceptual sets. *Canadian Journal of Psychology*, *15*, 205–211.

Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavallee, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 141–156.

Cohen, G. L. (2003). Party over policy: The dominating impact of group influence on political beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 808–822.

Cohen, G. L., & Garcia, J. (2005). “I am us”: Negative stereotypes as collective threats. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 566–582.

Crocker, J., & Major, B. (1989). Social stigma and self-esteem: The self-protective properties of stigma. *Psychological Review*, *96*, 608–630.

Echterhoff, G., Kopietz, R., & Higgins, E. T. (2017). Shared reality in intergroup communication: Increasing the epistemic authority of an out-group audience. *Journal of Experimental Psychology: General*, *146*, 806–825.

遠藤由美（1995）精神的健康の指標としての自己をめぐる議論　社会心理学研究，*11*, 134–144.

Epley, N., & Gilovich T. (2006). The anchoring-and-adjustment heuristic: Why the adjustments are insufficient. *Psychological Science*, *17*, 311–318.

Frantz, C. M. (2006). I AM being fair: The bias blind spot as a stumbling block to seeing both sides. *Basic and Applied Social Psychology*, *28*, 157–167.

Gilbert, D. T., Krull, D. S., & Malone, P. S. (1990). Unbelieving the unbelievable: Some problems in the rejection of false information. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 601–613.

Gilbert, D. T., Pelham, B. W., & Krull, D. S. (1988). On cognitive busyness: When person perceivers meet persons perceived. *Journal of Personality and Social Psychology*, *54*, 733–740.

Gilovich, T. (1990). Differential construal and the false con-

sensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 623–634.

Gilovich, T. (1991). *How we know what isn't so: The fallibility of human reasoning in everyday life*. New York, NY: Free Press.

Goldstein, E. B., & Brockmole, J. (2016). *Sensation and perception*. Boston, MA: Cengage Learning.

Haselton, M. G., & Buss, D. M. (2000). Error management theory: A new perspective on biases in cross-sex mind reading. *Journal of Personality and Social Psychology*, *78*, 81–91.

Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977). Category accessibility and impression formation. *Journal of experimental social psychology*, *13*, 141–154.

今井四郎（1999）認知　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典（p. 661）有斐閣.

Kahneman, D., Slovic, P., & Tversky, A. (1982). *Judgment under uncertainty: Heuristics and biases*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Kambara, A. (2017). Effects of experiencing visual illusions and susceptibility to biases in one's social judgments. *SAGE Open*, *7*, 1–6. https://doi.org/10.1177/2158244017745937

神原 歩（2021）態度が相反する他者への過度なバイアス認知を錯視経験が緩和する効果　心理学研究, *92*, 12–20.

Kennedy, K. A., & Pronin, E. (2008). When disagreement gets ugly: Perceptions of bias and the escalation of conflict. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *34*, 833–848.

Kenrick, D. T., & Simpson, J. A. (1997). *Evolutionary Social Psychology*. In J. A. Simpson, & D. T. Kenrick (Eds.) Why social psychology and evolutionary psychology need one another (pp. 1–20). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

古賀一男（2011）知覚の正体―どこまでが知覚でどこからが創造か―　河出書房新社.

Kruger, J., & Gilovich, T. (1999). "Naive cynicism" in everyday theories of responsibility assessment: On biased assumptions of bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, *76*, 743–753.

Leeper, R. (1935). A study of a neglected portion of the field of learning: the development of sensory organization. *The Pedagogical Seminary and Journal of Genetic Psychology*, *46*, 41–75.

Lewin, K. (1935). *A dynamic theory of personality*. New York, NY: McGraw-Hill.

Liberman, V., Minson, J. A., Bryan, C. J., & Ross, L. (2012). Naïve realism and capturing the "wisdom of dyads". *Journal of Experimental Social Psychology*, *48*, 507–512.

Meier, B. P., Schnall, S., Schwarz, N., & Bargh, J. A. (2012). Embodiment in social psychology. *Topics in Cognitive Science*, *4*, 705–716.

村上春樹（1991）ノルウェイの森 上　講談社.

根ヶ山光一（1999）適応 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典（p. 607）有斐閣.

Newton, E. (1990). Overconfidence in the communication of intent: Heard and unheard melodies. (Unpublished doctoral dissertation). Stanford University, Stanford, CA.

Niedenthal, P. M., Barsalou, L. W., Winkielman, P., Krauth-Gruber, S., & Ric, F. (2005). Embodiment in attitudes, social perception, and emotion. *Personality and Social Psychology Review*, *9*, 184–211.

Nisbett, R. E., & Ross, L. D. (1980). *Human inference: Strategies and shortcomings of social judgment.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Nisbett, R. E., & Wilson, T. D. (1977). The halo effect: Evidence for unconscious alternation of judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, *35*, 250–256.

Pronin, E., Gilovich, T., & Ross, L. (2004). Objectivity in the eye of the beholder: Divergent perceptions of bias in self versus others. *Psychological Review*, *111*, 781–799.

Pronin, E., Kennedy, K., & Butsch, S. (2006). Bombing versus negotiating: How preferences for combating terrorism are affected by perceived terrorist rationality. *Basic and Applied Social Psychology*, *28*, 385–392.

Pronin, E., & Kugler, M. B. (2007). Valuing thoughts, ignoring behavior: The introspection illusion as a source of the bias blind spot. *Journal of Experimental Social Psychology*, *43*, 565–578.

Pronin, E., Lin, D. Y., & Ross, L. (2002). The bias blind spot: Perceptions of bias in self versus others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *28*, 369–381.

Reeder, G. D., Pryor, J. B., Wohl, M. J. A., & Griswell, M. L. (2005). On attributing negative motives to others who disagree with our opinions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *31*, 1498–1510.

Robinson, R. J., Keltner, D., Ward, A., & Ross, L. (1995). Actual versus assumed differences in construal: "Naive realism" in intergroup perception and conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, *68*, 404–417.

Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, *13*, 279–301.

Ross, L., & Ward, A. (1996). Naive realism in everyday life: Implications for social conflict and misunderstanding. In T. Brown, E. S. Reed, & E. Turiel (Eds.), *Values and knowledge. The Jean Piaget Symposium Series* (pp. 103–135). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Smith, M., Wethington, E., & Zhan, G. (1996). Self-concept

clarity and preferred coping styles. *Journal of Personality*, *64*, 407–434.

Stanovich, K. E., & West, R. F. (2008). On the relative independence of thinking biases and cognitive ability. *Journal of Personality and Social Psychology*, *94*, 672–695.

Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (pp. 261–302). San Diego, CA: Academic Press.

Steele, C. M., & Liu, T. J. (1983). Dissonance processes as self-affirmation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *45*, 5–19.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, *103*, 193–210.

外山美樹・櫻井茂男（2001）日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象　心理学研究，*72*, 329–335.

Tversky, A., & Kahneman, D. (1974). Judgment under uncertainty: Heuristics and biases. *Science*, *185*, 1124–1131.

Uhlmann, E. L., & Cohen, G. L. (2007). “I think it, therefore it’s true”: Effects of self-perceived objectivity on hiring discrimination. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, *104*, 207–223.

浦 光博・北村英哉（2010）はじめに．浦光 博・北村英哉（編）個人のなかの社会―展望現代の社会心理学 1―　誠信書房.

Van Boven, L., Kamada, A., & Gilovich, T. (1999). The perceiver as perceived: Everyday intuitions about the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 1188–1199.

Vorauer, J. D., & Miller, D. T. (1997). Failure to recognize the effect of implicit social influence on the presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 281–295.

Williams, L. E., & Bargh, J. A. (2008a). Experiencing physical warmth promotes interpersonal warmth. *Science*, *322*, 606–607.

Williams, L. E., & Bargh, J. A. (2008b). Keeping one’s distance: The influence of spatial distance cues on affect and evaluation. *Psychological Science*, *19*, 302–308.

Wilson, T. D., & Brekke, N. (1994). Mental contamination and mental correction: Unwanted influences on judgments and evaluations. *Psychological Bulletin*, *116*, 117–142.

Zuckerman, M., Kernis, M. H., Guarnera, S. M., Murphy, J. F., & Rappoport, L. (1983). The egocentric bias: Seeing oneself as cause and target of others’ behavior. *Journal of Personality*, *51*, 621–630.

― 2022. 4. 5　受稿，2022. 11. 24　受理 ―